

【関連報告】 ヴェネツィアから思う MLA

信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野
金井直

現在、私は1年間のサバティカル（研究休暇）を得てヴェネツィアに滞在し、ヴェネツィア大学“カ・フォスカリ”の客員研究者として調査研究をおこなっています。具体的には、同大附属図書館とチーニ財団図書館（美術史研究の重要拠点）を軸に、国立マルチャーナ図書館（16世紀創設。東ローマ帝国由来の貴重典籍多数）、クエリーニ・スタンパリア図書館（19世紀開設。ヴェネツィア史関連書籍多数）、ヴェネツィア・ビエンナーレ図書館（現代美術に特化）等、ヴェネツィア島内の図書館を行き来しながら、資料の収集をすすめる毎日です。



チーニ財団図書館内観

ところで、私はおよそ20年前にもヴェネツィアに2年間ほど住み、同じように図書館通いをしていました。その当時と現在を比べれば、利用の効率にはたいへんな相違があります。1990年代はまだOPACは実働状態になく、年代物の図書目録カードをひたすら漁り、滑らかな、ゆえに読みにくい筆記体の文字を解読し、閉架の書物閲覧を申請。本を受け取ると、デジタル撮影・スキャンといった方法はまだありませんでしたので、ただひたすら書き写す、といった、ある意味では中世以来の勉強法を実践していました。とにかく効率は悪く、ひとつの館で目録カードを見るだけがその日の仕事ということもよくありました。

拡張するセレンディピティ

もちろん、現在ではヴェネツィアのすべての館の資料がOPACによって外部からも検索可能です。さらに国が運営する Il Polo SBN di Venezia

(<http://polovea.sebina.it/SebinaOpac/Opac>) によって、上記の 5 つの図書館に加え、ヴェネツィア市内の国立アーカイヴ、美術アカデミー、そして公立・私立の美術館図書室の図書資料が統合的・横断的に検索可能になりました(2009 年～)。以前であれば、1 日のうちに複数館をめぐることは相当難儀であり、徒労感を伴うものであったのですが、いまや資料の所在を把握した上で、島内の図書館、美術館、アーカイヴをぐるりと回るといことも可能になりました。

その容易さが、私に何を許しているかといえ、書棚や目録カードから生まれるのとは別種のセレンディピティです。たとえばチーニ財団ではコンサート、マルチャーナやクエリーニ・スタンパリアでは展覧会、大学や美術館ではトークやシンポジウムなどが、不定期に開催されるのですが、そうした催事に偶然触れ、非常に心動かされるということがよくあります。ネット上の書誌情報に促され、さまざまな施設にじっさいに足を運ぶことによって始めて、ネット上では看過していた魅力的なできごとに出会うということです。また、世界遺産ヴェネツィアならではのかもしれませんが、余裕をもって街を歩くことで、調査対象の資料と関連する旧跡や歴史的景観にあらためて出くわすこともしばしばです。図書館に終日籠った 20 年前の日々は懐かしくもありますが、やはり、今日の MLA のネットワークの充実が、より広がりのある芸術経験、文化との接触を可能にしてくれているというのが私の実感です。



Il Polo SBN di Venezia (<http://polovea.sebina.it/SebinaOpac/Opac>)

リーディングルーム

最近見た印象的な展覧会に「Gravity」(ローマ国立 21 世紀美術館、12 月 2

日—4月29日)があります。同展会場内にはリーディングルームが用意され、重力・宇宙・地球に関する関連書籍が閲覧可能になっていました。重要なのは、その閲覧空間が、既存の図書閲覧室・資料室とは異なって、展覧会の流れのなかに、物理的にもデザインの的にも、きわめて有機的に組み込まれていた点です。同様の、美術館・展覧会における「見る」と「読む」の接続は、去年のヴェネツィア・ビエンナーレにも見られました。そこでは出品作家の選書による「マイ・ライブラリー」がメインパヴィリオンの内部に設置されていました。思えば日本でも、たとえば2016年のあいちトリエンナーレには、その名もまさに「ライブラリー」というスペースが設けられ、キュレーターが選んだ関連図書が紹介されると同時に、トークやワークショップなどの会場としても弾力的に活用されていました。「見る」「読む」さらには「語る」「つくる」を融合する実験だったわけです。展示のなかに書籍・読書を導入するこうした試みは、近年の多様化するアートシーン（見ればわかる、見るからに美しい美術の時代は過ぎ去りました）にたいするキュレーション・展覧会側からの応答として、きわめて注目されるものですが、同時に、MとLの境界融合事例としても非常に興味深いものではないでしょうか。

提案的に

さて、上に述べたようなLへのアプローチがM内にしばしば見いだされる現在、逆にLからMへどのような回路を開くことが可能でしょうか。もちろん検索システムの統合によって、たとえば個別の図書館資料から関連する博物館資料へ、さらには同資料の展覧会情報・履歴へ、といった横断の実現が期待されますが、現状としては容易なことではないでしょう。将来的な課題・目標だと思います。

では、より実行の容易な試みはないでしょうか。ささやかながらひとつ。イタリアのミュージアムを回っていると、図書館入館証の呈示で、入館料減額としている館がみられます。金額的にはそれほど大きなことではなく、地域住民への若干の還元ていどに思われますが、図書館利用者を博物館にいざなうという意味では、ベクトルの確かな料金設定と言えるでしょう。つまり、Lにおける資料の閲覧行為をMにおける鑑賞行為に接続するひとつの回路を示してい

るのです。そこには経営論的な利用者獲得・包摂のタクティクスを超えた、資料論的な問いかけ、制度論的な戦略も見いだされるはずです。

L から入る M。その方向性をさらに強調・特化するには、たとえば、図書館利用証呈示者は、博物館資料を図書資料と連続的に利活用するものと認め、図書館同様入館料無料としてもよいかもしれません。ミュージアム無料化問題は、博物館法の文言と実態の乖離によって常に論じられるところではありますが、図書館とのアナロジー、L から M へのシームレスな利用形態を念頭に置けば、少なくとも常設・コレクション展示の無料化には筋が通るように思います。そのための運用実験として、まずは図書館利用証を活かしてみる。教育県を標榜する長野県においては、意義の説明しやすい ML 連携となるのではないのでしょうか。

その他、実行可能な工夫から、より理念的な面まで、ヴェネツィア、イタリアで資料に触れ合いながら思うことはさまざまです。急速なグローバル化／一元化に直面する現在であればこそ、あえて非英語圏の伝統のなかに、MLA 連携のさまざまなかたちと鍵を探ることに意味がありそうです。いずれまとめてご報告する機会があればと思います。

(2018.2.21)